



ちょっとしたプレゼントの社会的機能を検証

～人はなぜ些細な贈与をするのか～

<ポイント>

- ◎贈与という行為は、支払ったコストを上回る利益につながる時に行われるものとされてきたが、そのような利益につながらない、些細な贈与（※）が日常的に行われていることに着目。
- ◎些細な贈与がどのような社会的機能を持っているのかを経済ゲームを使って検証。
- ◎パートナーと将来的に協力する機会がある場合に、相手に信頼してもらうためのアピールとして行われている可能性を指摘した。

（※）些細な贈与：隣人と食べ物を共有することや友人とのプレゼント交換、引越して渡す粗品、職場でのお菓子配りなど、古くから日常で広く観察されている行動



<些細な贈与の例>

大阪公立大学大学院 現代システム科学研究科 河村 悠太准教授らの研究グループは、些細な贈与という振る舞いが、どのような機能を持ち、どのような条件下で行われているかについて実証実験を行いました。その結果、贈与する対象者が、協力関係を将来的にも持続するパートナーの場合と、そうではない場合では、些細な贈与が行われる頻度の差がみられ、些細な贈与が自分の信頼性を示すためのシグナルとして用いられている可能性があることを明らかにしました。本研究成果は、The Human Behavior and Evolution Society が刊行する国際学術誌「Evolution and Human Behavior」に2023年4月20日にオンライン掲載されました。

現代システム科学研究科（心理学）河村 悠太 准教授

日常的に観察される些細な贈与という振る舞いにどのような機能があるかを考えること、そして想定される機能をどのような形で実証的に研究できるのかを考えることが楽しかったです。今後は、現実社会の複雑さを組み入れた実験を行うことも想定しています。



<研究の背景>

ちょっとした贈り物を交換する、食べ物を分け合うなど、些細な贈与は日常にあふれています。しかし、このような些細な贈与は一見すると、何の機能も持たない（≒行う必要がない）ようにも思われます。なぜなら、人々がお互いに贈与をしあっても、あるいは贈与をせずに自分のために資源を使っても、物質的な利益の総量は変わらないからです。

先行研究から、こうした些細な贈与が行われる理由として、2つの可能性が考えられました。1つは、互いに資源を出し合うことでより大きな利益が得られるような協力場面と、些細な贈与場面を人々が区別していないという可能性です（以下、エラー仮説）。もう1つは、些細な贈与が、行為者が協力的な人物であることを示すシグナルとして機能している可能性です（以下、シグナル仮説）。

本研究では経済ゲームを用いた実験を実施し、実験の中で協力的な人物であることを示す必要性の高い条件と低い条件の2つを設けて、些細な贈与の頻度が変わるかを調べました。エラー仮説が正しいのであれば、どちらの条件でも些細な贈与の頻度は変わらないと予想できます。一方シグナル仮説が正しいのであれば、協力的な人物であることを示す必要性の高い条件で、些細な贈与の頻度がより高くなると考えられます。

<研究の内容>

本研究では、次のような実験を行いました（図）。参加者はコンピュータを通して2人組のペアになり、毎回渡されるポイント（注1）を相手のために使うか、自分の手元に残すかを決めました。渡されるポイント数と、相手のために使ったときに相手が見られる利益は試行タイプによって異なっていました。些細な贈与試行では100ポイントが渡され、それを相手のために使う（相手に贈与する）と相手は100ポイントを得ることになっていました。つまり、互いに贈与しあっても、贈与せず自分のために残しておいても、得られる利益の総量は変わりません。一方、協力試行では1000ポイントが渡され、相手のために使う（相手に協力する）と相手は3000ポイント得ることになっていました。すなわち、互いに相手のために振舞うとより大きな利益が得られるような状況です。些細な贈与試行と協力試行は7:1の頻度で生じ、次の試行（注2）がどちらになるかは分からない状況でした。

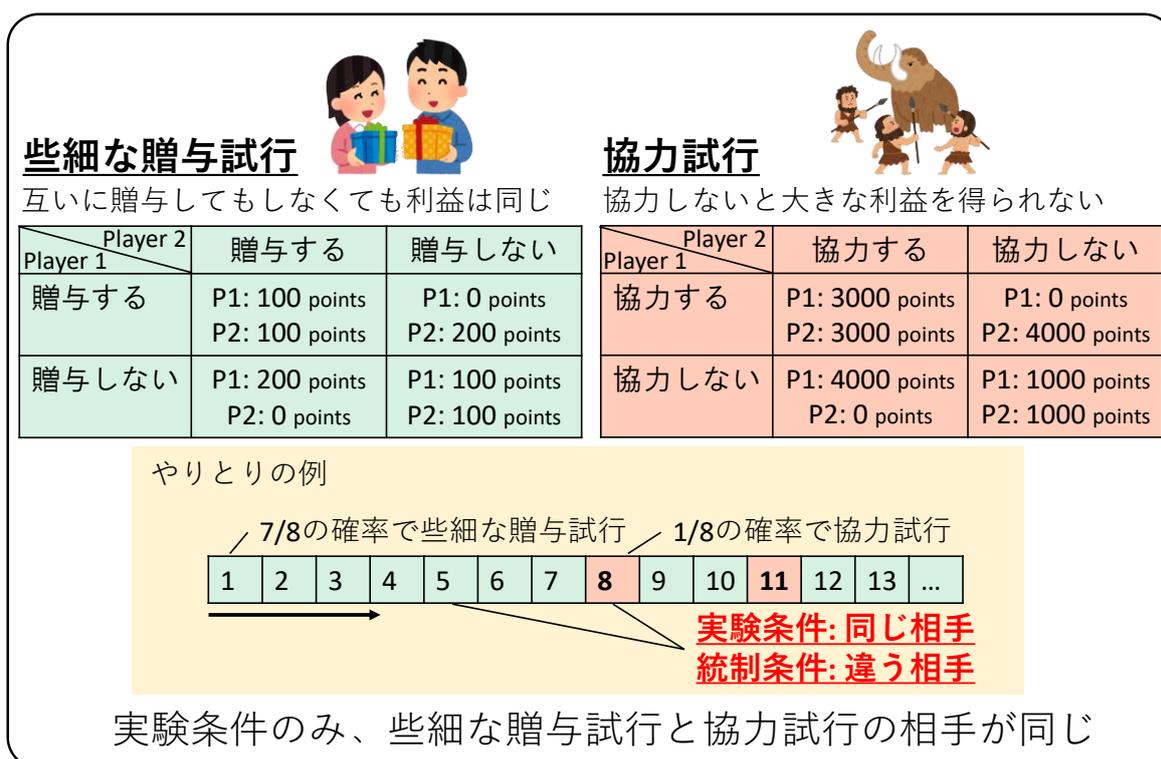


図. 実験の概要

協力試行では相手のために振舞えば大きな利益が得られるので、一見誰もが相手のために振舞うようにも思えます。ただし、ここで一方のプレイヤーだけが相手のためにポイントを使って、もう片方のプレイヤーは自分の手元に残した場合、相手のためにポイントを使った人は1ポイントも得られないので、一方的に損をすることになります(注3)。つまり、相手もまた協力的に振舞ってくれる人物なのかという点が、相手のために振舞うかどうかを判断するうえで重要です。逆に言えば、相手から協力的に振舞ってもらうには、自分も相手のために振舞うような協力的に振舞う人物であることを知ってもらう必要性の高い状況だと言えます。

実験条件の参加者は、些細な贈与試行、協力試行の両方を同じ相手と実施しました。統制条件では、些細な贈与試行と協力試行で相手が異なっていました。つまり、実験条件では、些細な贈与試行で相手のために振舞い、協力的な人物であることを協力試行のパートナーに示すことができます。一方の統制条件では、些細な贈与試行で相手のために振舞っても、協力試行のパートナーに対して自分が協力的な人物であることを示すことはできない状況でした。

実験の結果、統制条件での些細な贈与の割合は2%程度だったのに対し、実験条件では、約33%でした。つまり、協力的な人物であることを示す必要の高い実験条件では、統制条件に比べて些細な贈与が多く観察されていたことが分かります。これは、些細な贈与が、協力的な人物であることを示すためのシグナルとして用いられている可能性(シグナル仮説)を支持する結果でした。

(注1)このポイントは、実験の最後に金銭報酬に換算されることが事前に伝えられていました。

(注2)参加者はこのやり取りをパートナーと繰り返し行いました。ただし、毎回20分の1の確率でやり取りが終了することになっていました。あるパートナーとのやり取りが終了すると、パートナーが交代され、別のパートナーと再びやり取りを行いました。

(注3)このような構造を持つ経済ゲームは一般的に囚人のジレンマゲームとして知られています。

<期待される効果・社会的意義・今後の展開>

今回の研究は、些細な贈与の機能を実証的に示しました。しかし、きわめて限定的な場面での結果である点には注意が必要です。例えば今回の研究では、参加者はポイントのやり取りをする相手を自由に選ぶことができませんでした。しかし現実には、人々は社会的なパートナーをある程度自由に選ぶことができます。より複雑な現実社会の中でも些細な贈与がシグナルとしての機能を持つのかを検討する必要があります。あるいは、そうした複雑さを組み入れた実験を行うことも今後の展開の1つとして想定しています。

<資金情報>

本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費(19J00352)および若手研究(22K13794)の支援を受けて実施されました。

<掲載誌情報>

【発表雑誌】 Evolution and Human Behavior

【論文名】 Trivial giving as a signal of trustworthiness

【著者】 Yuta Kawamura, Misato Inaba

【掲載 URL/DOI】 <https://doi.org/10.1016/j.evolhumbehav.2023.04.001>

【研究内容に関する問い合わせ先】

大阪公立大学大学院 現代システム科学研究科

准教授：河村 悠太(かわむら ゆうた)

E-mail: ykawamura@omu.ac.jp

【報道に関する問い合わせ先】

大阪公立大学 広報課

担当：塩根

TEL: 06-6605-3411

E-mail: koho-list@ml.omu.ac.jp